●巻頭言

国際援助システム委員会誕生

International midwifery invitation program

毛利 多恵子 (Taeko MOHRI)*

日本助産学会国際援助システム委員会委員長

2002年春から、新しい委員会「国際援助システム委員会」が誕生しました。

国際援助には、海外から日本に研修に来られる方々への援助、日本に在住している外国人への援助、日本から海外へ出向いての援助、とさまざまな援助があると思います。当面は、「助産」の研修を希望される海外の方々に対しての研修プログラムの企画・実施と評価および援助システムの確立が期待されています。

日本に来られた開発途上国の研修の方が、「日本には立派な病院があり、素晴らしい機器がありますね。でも立派な施設を見るだけでは、私たちの国に帰っても、生かせるものがないのです」と言われました。日本の文化や生活にも触れるチャンスがあり、しかも日本の助産を共有でき、お互いの情報や意見を交換する楽しい研修を企画できればと考えています。

ブラジル母子保健国際協力では、助産というケアを中心とした「ソフト」が共有されました。その結果、現地の人は、「日本は物でもお金でもなくフィロソフィーを贈ってくれた」「大事なことは、とてもシンプルで小さなことから始まることがわかった」「わたしたちの中にすでにあったことを思い出させてくれた」と評価しました。「助産という文化を越えた知恵の共有」と「それぞれの文化の中で育まれていく創造性の元となるコアの共有」の重要性を感じました。

日本助産学会だからこそできる国際援助システムづくりとは、どのようなものでしょうか？

まずは、助産に関する研究や地域で行われているプライマリ・ヘルス・ケアとしての助産実践活動を共有することから開始できればと考えています。いずれも、ハードというよりはソフトの面での交流を通して、お互いがエンパワーメントしあえる国際援助を考えていきたいと思います。

そのためには、人材が必要です。助産関連で国際協力の経験をもつ人材バンクや海外からの研修の募集など、また関係機関との連携などシステムづくりの基礎に皆様のアイデアと情報をお待ちしています (mohri@db3.so-net.jp)。

委員は、南米、アジアでの国際協力を経験した藤原美幸さんと嶋沢恭子さんと毛利の3名です。よろしく願いいたします。

---

* 毛利助産所 (Mohri Birth Home)